

インターホン玄関子機における画面サイズ拡大の試み

090430054 竹谷勇人
川澄研究室

1. はじめに

昨今の家庭用インターホンは、室内側に画面の付いたテレビドアホンが多く出回り、多機能化が進んでいる。これまでにアイホン株式会社と共同で、玄関側の子機に画面を付けることによる効果について検討してきた[1][2]。

本研究では、玄関側に付けた画面のサイズをさらに拡大させることによる印象の変化や、新たな利用可能性について調査した。

2. 実験方法

2.1 実験機器

Apple社のiPhone4, iPad2にiOS SDKを用いてインターホンのような応答アプリを実装し玄関子機として見立てた実験用インタフェースを作成した(インターホン B, C: 図1)。比較実験の対象として従来型の玄関子機も用意した(インターホン A: 図1)。



図1 実験機器

2.2 実験刺激

インターホン B, Cの画面は訪問者のタッチにより、待機中、呼出中、通話中へと状態が遷移する(図2)。今回、画面の拡大に伴い呼び分けボタンを追加するなど、インターホンとしての新しいサービスや機能を実装した。



図2 状態遷移(インターホン C)

2.3 評価方法

「楽しさ・面白さ」「便利さ・役立ち度」「活用の幅広さ」「将来性」「好感度」の5項目について、定量評価(7段階)を3種類のインターホンに対して、またインターホン Cの場面別(待機中、呼出中、通話中)に対して実施した。その後、評価の理由や意見をヒアリングした。被験者は、主婦、シルバー、中国人を中心に計94名にご協力いただいた。

3. 実験結果

全ての項目においてインターホン Cの評価が Bよりも高くなった(図3)。特に、「楽しさ・面白さ」「便利さ・役立ち度」「活用の幅広さ」の3項目において大きな差が見られた。

待機中に対しては、シルバーの評価が全体的に低く、中国人は「便利さ・役立ち度」の評価が低い。「好感度」の評価が高かった(図4)。複雑な操作に対する高齢者の不安感や、中国においてインターホン設置率が低い事情などが関係していることが考えられる。

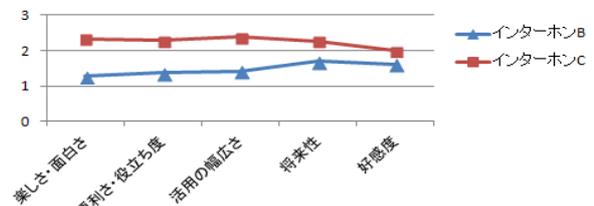


図3 インターホン B, Cの評価

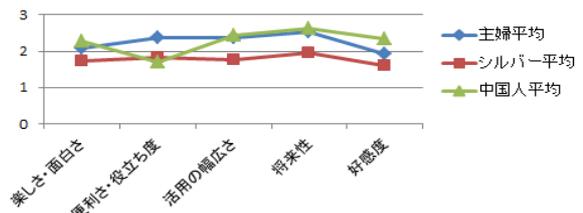


図4 待機中(インターホン C)の評価

4. まとめ

インターホンの玄関子機に画面を付けるという先行研究を受け、画面サイズ拡大の効果を検証した結果、大きくした方が好印象であることがわかった。また、単純な操作の必要性などユーザ別の傾向や需要を把握することができた。

謝辞

研究の企画、計画など多くのご協力をいただいたアイホン株式会社の皆様、評価実験にご協力をいただいた長久手シルバー人材センター登録の皆様、名城大学の学生、教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 川澄未来子, 高幡幸太郎他: 「インターホン玄関子機へのディスプレイ搭載の試みーiPhone アプリを使った体験評価実験ー」, 第14回感性工学会全国大会, P2-43(2012)
- [2] 川澄未来子, 高幡幸太郎他: 「インターホン玄関子機へのディスプレイ搭載の試みーディスプレイサイズ拡大の効果ー」, ヒューマンインタフェースシンポジウム 2012, 1507D(2012)